

Ⅱ 一人一人を生かした教育の実践に向けて 幼稚園 「一人一人を生かした教育を目指して」

1 テーマについて

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである。幼児は、幼児を取り巻く環境と関わりながらたくさんのかことを学んでいる。現在は、どの幼児教育施設においても「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共通の方向性として教育活動が行われている。

幼児にとって幼稚園は、初めての集団生活の場となる。その中で、幼児は、家庭とは違ったルールがあることを知り、集団生活に必要なルールや生活の仕方を身に付け、またいろいろな人と出会いながら人と関わる楽しさを味わったり、人と関わる力を培ったりしていく。まさに社会人としての第一歩を踏み出すわけである。

幼児たちは常に前向きで、大きくなりたい、学びたいと願っている。そんな幼児たち一人一人を大切に伸ばしながら、集団生活の機能を生かし、計画的に様々な体験を積み重ねていけるような学びの場を提供していくことが幼稚園の役割と言える。

今回のテーマは「一人一人を生かす」ということ。一人一人を生かすとは、一人一人の違いを認め合うことだと考えている。幼児期は、個人差が大きい時期である。だからこそ一人一人の特性をよく見て、理解して、寄り添い、その子に即した援助を考えていくことが基本となる。

とはいえ、個々を尊重し、一人一人に対応していく大切さは理解できるが、個と集団の経験のバランスをどう取っていくかが教師の大きな悩みであり、課題となっている。

また、昨今、公立幼稚園の現状を見てみると、園児数の減少が一番の課題となっているが、その中で特別な支援を必要とする幼児や外国籍の幼児は増加傾向にあり、各園多様な対応が求められている。一人一人に向き合うことが大事である、そうありたいと願う教師の理想とそうはいっても対応しきれない現実とのほざまの中での葛藤にどう向き合うべきか、一人一人を生かした学級経営はどうあるべきかなどを事例を通して一緒に考えていきたいと思う。

2 「一人一人を生かす」ための保育の実践力を高めよう

事例1 少人数学級（11名）の中に4人の特別支援児がいる学級経営。

ある区では、特別に支援を要するお子さんは各学級で4人までと決まっていた。園児数が多かった時にはそれでも学級としての経営が成り立っていた。しかし、園児数が減少し、母体となる健常児の数が減り、集団としてのまとまりや活動が停滞しがちとなってきている現状が見られた。

この幼稚園でも11名のうち4名が特別支援児ということで、一人一人への対応に追われ、今までのような計画や活動では育ちを促すことが難しくなっていた。それでも子供たちは、幼稚園に喜んで登園し、担任や介助員たちに支えられて少しずつ成長してきた。

年長になり、担任が変わり、外国籍の園児も新たに入園し、学級の雰囲気も変わり始めていた。一人一人の対応に追われながらも年長としての活動（飼育物の当番や誕

生会の司会等)にも取り組んでいた。運動会などの大きな行事では、今できることは何かを考え、年長としての自覚を促し、一人一人の活躍の場を作り、教師も子供たちも精一杯取り組み、やり遂げた満足感を味わうことができた。

11月、今度は園を上げてのフェスティバルが予定されていた。水族館に遠足に行き、それぞれが経験したことを基に魚を作ったり、絵を描いたりして再現遊びを楽しんだ後、担任は、お客さんと呼んでのフェスティバルがあることを投げ掛け、昨年の経験も踏まえてどんなことをしたいのかを相談することにした。一人一人の顔が見えるように円形に座り、それぞれの考えを聞き出していた。

A児は、ほとんど言葉が出ず、単語で話したり、動きで表現したりすることが多かった。この日は学級の一員として友達の話の聞いたり、自分なりの考えを伝えようとしていたりしていた。一度みんなの考えを聞いた後、担任が他にも考えがあるかともう一度聞いていったとき、A児が一生懸命言葉を発しながら表現しようとしていた。担任は、「なんだろう？さめ？」と聞きながらA児だけでなくみんなの顔も見た。A児は違うと言いながら一生懸命自分の思いを伝えようと「シュツシュツ」と声を出して表現していた。他の幼児たちも自分が思い付いた魚の名前をA児に問い掛けるが、A児は違うと言い、「シュツシュツ」と繰り返していた。その時B児が「へび？」と言うとA児は嬉しそうに「うん」とうなずいた。みんなもほっとしたように喜び、BちゃんすごいねとB児を讃えていた。

降園時に担任は、保護者にこの出来事を伝えた。保護者は「最近、へびにはまっていて、みんなにわかってもらえて嬉しかったと思います。ありがとうございました。」とお礼を述べていた。

【事例から考えられること】

- ※安心・安定できる温かい居場所作りが基本
- ※一人一人に学級の一員としての意識を高める
- ※学級としての育ち合いを支えていく雰囲気作りをする
- ※丁寧な対応と急がず長いスパンで計画し、実践していく
- ※少人数だからできること、プラスの発想で取り組む

一人一人を生かすとは、一人一人に学級の中に居場所があることだと考える。そしてその居場所は居心地がよく、温かい場所であることが必要となる。

この学級は、急がずに一人一人の課題や良さに向き合い、長いスパンで計画を立てながら実践してきた。担任や園全体が、一人も取りこぼさず、一人一人と向き合い、大事にしてきたというその成果がA児やA児を取り巻く学級の子供たちの「みんなで考えよう」の姿として現れたと考える。学級を運営する担任の意識や子供への向き合い方で子供たちの育ちも変わってくる。それとともに、少人数だからこそ一人一人の存在感が増し、一人一人を生かす工夫がキーワードとなる。「少人数だからできることは何か」をプラスの発想で柔軟に考えていくことが必要である。

事例2 言葉が通じない外国籍の幼児への対応

C児は、両親ともに中国籍で日本語が話せない。保護者への連絡事項などは、主任が翻訳機を使って伝えたり、別の保護者に仲介になってもらったりしながら伝えていた。

C児は、子供たちの動きを見ながら動こうとするが、うまくできずに部屋から出て行ったり、大きな声を出したりすることで自分を表現しようとしていた。

担任は、C児が早く学級の一員として適応してほしいと願ってはいるが、具体的な対応ができずに、C児の行動に対して「それはだめ」と否定的な言葉を掛けることが多かった。それゆえにC児は、担任には近付かず、なかなか関係を築くことができない状況が続いていた。

【事例から考えられること】

- ※C児の思いや困り感に寄り添う
- ※翻訳機の活用を積極的に行う（伝える、伝わる嬉しさの共有）
- ※文字と絵を用いてコミュニケーションを図る（見える化）
- ※長期の見通しを立て、急がず、時間をかけて丁寧な関わりを心掛ける
- ※保護者や支援員なども巻き込んだ協力体制を図る

新しい環境に適応することは、外国籍の幼児だけでなく、だれもが緊張し、時間の掛かることである。ましてや言葉が通じなければなおさらである。園生活の始まりはまずは「安定・安心」である。そこには一人一人に合わせた丁寧な対応が求められる。時折担任は、「集団性や計画性」を求めがちになる。自分の計画や思いが優先してしまうと子供の思いや行動を見落としがちになる。願いをもつことは大事だが、まずは子供に寄り添うことから始めなければならない。

C児の不安感にもっと寄り添うことが必要である。行動の背景の思いに心を寄せることである。さらに日常生活に必要な簡単な言葉をその国の言葉と日本語と絵を添えて見える化して伝えることから始める。知ることは自分から動くきっかけとなる。

伝えるとは、相手に伝わって初めて伝えたことになる。担任一人では対応しきれないときは、園全体で取り組めばいい。まずは一人一人が安定することを目指し、方法は柔軟に考えていけばよい。今までこうだったからとかこの方法しかないとかという固い考え方ではなく、いろいろ試みる、一緒に向き合うことをしなければ信頼関係を築くことはできないのである。

一人一人の安定が学級の安定につながる。長期的な展望とみんなで育てる協力体制を築いていくことがポイントとなる。

事例3 保護者も育つために

コロナ禍で人と関わる機会が薄れ、人との距離感の取り方や関わり方が分からないという悩みは子供だけでなく、保護者の間でも見られる。昨今はPTA活動に関しても任意なら加入はしないという保護者も出てきた。

ある幼稚園でも「自分是人前に出るのが苦手なのでそういう活動は参加したくない。保護者の会にも加入したくない」という申し出が出てきた。少人数の園なので一人の不参加は全体への影響も大きいと考え、園長先生も今後の対応に悩んでいた。

【事例から考えられること】

※園長先生出番です。

※実態に合った活動を精選し、やってよかったという経験を積み上げていく。

昔からPTAなどの会の役員決めは、難航していた。役員になると仕事をいっぱい振られるからやりたくない、できれば避けたいという思いの保護者がほとんどであったと思われる。しかし、「子供たちのために」という思いから人の役に立つことを率先してやってくださった方々のおかげで教育活動の充実が図れてきた。

しかし最近は価値観がさらに多様化し、役員決めが今まで以上に難しくなっている。ましてや少人数になり、保護者の会そのものが消滅してしまう危惧も出てきた。子供たちの豊かな体験のため、子供たちの育ちを促すためにと始まった保護者の会だが、いままでのやり方を踏襲していくことは困難な状況になってきたと言える。

ならばもう一度、何のための会なのかを振り出しに戻って話し合えばよい。幼稚園だけでできること、保護者に協力していただかないとできないこと、保護者だけでしていきたいことなどに振り分けて、教育課程を見直し、方法や活動ではなく、目的を明確にもって見通しを立てればよいと考える。その際は、園長先生の出番なのである。園長の経営方針が明確であることが重要となる。幼稚園教育は、子供たちの育ちを促すために行われるもの。その充実のためには、保護者の協力が必要となる。どこをどのように協力していただきたいのかを具体的に明確に示し、熱をもって伝えればきっと最善の方法が見つかる。

そして協力を仰いだ時には、必ず充実感や達成感が味わえるようにしていくことが大切である。今までも役員をやっていただいた保護者の方々は必ず小学校に行っても役員を申し出てくださっていた。子供たちの笑顔を見る機会が増え、役に立った喜びを味わったからこそだと思われる。会の目的が明確であれば保護者の意識も高まり、人生にも豊かさが出てくると確信する。保護者が育つポイントは、人の役に立った喜びや充実感を味わえる機会を園側が作ることである。

3 まとめ

一人一人を生かすことは、それぞれの特性を認め合い、それぞれの役割を自分事として捉え、集団の中でも自分らしくいていいということを感じさせるとともに、相手にも思いがあることを忘れないように常に相手も意識させていくことだと考える。

一人一人を育てることと集団を育てることは乖離することではなく、一人一人を育てることが共同体としての集団が育つことになることを常に意識し、実践していくことが大切である。そのためには、管理職が、目的や方向性を明確に示すことはもとより、それぞれの教員が研修を怠らず、向上心をもって専門性を磨き続けていくことが必須であると考えられる。

以下、一人一人を生かすために大切にしたいことを具体的な提言としてまとめてみた。

① 一人一人の「安心・安定」を支えよう

幼稚園が子供にとって初めての集団生活の場であり、社会の一員としての第一歩の場所であることは冒頭で述べた。まずは幼児一人一人が安定するために子供の側に立って寄り添うことから始めるといい。行動の表し方は、みな違う。現れた行動をよく見ながら、行動の背景にある思いに寄り添い、支えていくことが基本である。

② 一人一人に対しての願いを基に具体的な方策や方法を考えよう

一人一人の違いに対してどのように育ててほしいのかの願いをもつことがまずは大事である。その際には、短期ではなく、長期の見通しの中で子供の成長と共に願いも塗り替えていくことが必要である。その願いを基に具体的な方策を考えるのだが、その基本となるのが「自分が好き、人が好き」という感覚を育てることである。人の中で人と出会い、人として育っていくためには自己肯定感をもてるように援助していくことが必要である。居心地のいい空間の中で過ごす心地よさを味わわせること、「子供の行動には必ず意味がある」と考え、常に思いに寄り添うこと、その子の特性を生かす援助の工夫をしていくこと、柔軟な発想で応援し続けることがポイントとなる。さらには「うれしかった、楽しかった、面白かった」という体験の充実を図ること、人の役に立つ喜びや人から必要とされている感覚を味わわせることなど、長期の見通しの中で一人一人の実態を園全体で共有しながら具体的な方策を考えていくことが大切である。

③ 保護者も育つ体験や場づくりをしていこう

幼稚園を選ぶのは子供ではなく、保護者である。保護者も久しぶりに社会の一員として幼稚園にやってくる。初めてへの緊張感は子供より大きいかもしれない。コロナ禍で希薄となった人との関わりをもう一度取り戻し、人の役に立つ喜びや人と関わる楽しさの感覚が味わえる機会を作っていくことが幼稚園の役割の一つだと考える。PTA活動は子供のためだけでなく、自分のためにもなる活動である。幼稚園で出会った仲間がその後もつながっていることをよく聞く。いい関係作りの場を積極的につくっていくことが必要である。